生態人類学会　ニュースレター No. 29 別冊

特集　大塚柳太郎氏追悼

THE SOCIETY FOR ECOLOGICAL ANTHROPOLOGY

目次

◆フィールドの大塚先生｜安髙 雄治｜関西学院大学 …… 3
◆国際人の大塚さん｜市川 光雄｜京都大学名誉教授 …… 4
◆大塚さんと生態人類学研究会・生態人類学会｜稲岡 司｜佐賀大学名誉教授 …… 5
◆大塚さんの研究｜梅﨑 昌裕｜東京大学大学院医学系研究科 …… 6
◆ロールモデルとしての大塚先生｜小谷 真吾｜千葉大学文学部 …… 6
◆大塚さんが大好きでした｜河合 香吏｜東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 …… 8
◆パプアニューギニア調査｜河辺 俊雄｜高崎経済大学地域政策学部 …… 9
◆オオツカは飲んだど〜｜木村 大治｜フリー ……12
◆人類生態学のプロ｜小西 祥子｜東京大学大学院医学系研究科 ……13
◆ありがとう　大塚さん｜佐藤 弘明｜浜松医科大学名誉教授 ……14
◆最後は会わずじまいの大塚さん｜篠原 徹｜滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長 ……15
◆大塚先生の忘れられないひと言｜末吉 秀二｜吉備国際大学 ……16
◆大塚さんを偲んで｜須田 一弘｜北海学園大学人文学部 ……18
◆大塚さんを偲んで｜高坂 宏一｜杏林大学名誉教授 ……19
◆大塚さん、ありがとう―幻の約束から『生態人類学は挑む』まで｜寺嶋 秀明｜神戸学院大学名誉教授 …20
◆憧れと畏敬｜古澤 拓郎｜京都大学 ……23
◆大塚柳太郎先生を偲ぶ｜門司 和彦｜長崎大学 ……24
◆不肖の弟子として｜山内 太郎｜北海道大学大学院保健科学研究院 ……26

表紙写真
パプアニューギニアでの大塚さん／日焼けした大塚さん（44 歳）と女の子
（写真ご提供：稲岡司先生）

フィールドの大塚先生

安髙 雄治
関西学院大学

大塚先生と初めてお会いしたのは、1993 年の春に人類生態学教室を訪ねて、大学院での研究について話を伺ったときである。

私は、その直前までさまざまな環境に暮らす人びとの生活などを見て回り、その過程で経験したことなどをもとに腰を据えて調査をしたいと考えていた。大塚先生（以後、大塚さんと呼ばせていただきます）は一通り私の話を聞いた後、これまでどんな調査をしてきたのかと質問された。私は、調査許可を取得しての滞在ではなく、経験はないことを正直に伝えたが、「何かあるでしょ」と返答を求められ、答えに窮した。大塚さんにとっては、まともな調査の経験もなく、しかも少し回り道をしてこれから人類生態学研究を行おうとすることが理解不能だったのだろうと思う。そのときは、やむを得ずとても調査とは呼べないようなことを説明したが、私の返答には間違いなく呆れられたはずである。ただ、最後には「これでも読んで勉強して」と『ORIOMO PAPUANS: Ecology of Sago-Eaters in Lowland Papua』を渡してくださった。ちょうど新年度を迎える時期であり、大学院に入るのは早くても一年後であったため、まずは研究生として在籍を認めていただくこととなった。

1994 年度からは院生となり、パプアニューギニア調査に従事することになった。大塚さんの科研費調査隊に加えていただき、滞在する場所の選定時には稲岡司さん（現在、佐賀大学名誉教授）が同行してくださって、マヌス州のバロパと呼ばれる島々の一つに入った。島では、まずは言葉を覚えつつ家系図などを作成し、しばらくしたら来島する予定であった大塚さん率いる調査隊の説明などをして到着を待った。調査隊は、この島での生体試料の収集などが終われば次は小谷真吾さん（現在、千葉大学）の待つ別の島に移動するという短い滞在だったが、このときに大塚さんと二人だけでしばらく一緒に歩くという機会があった。

私が調査した島は、円形に近い火山島であり、ほとんどの村は北岸沿いに並んでいた。私の調査対象村は西端に位置し、調査隊も一時的にそこに寝泊まりし拠点として、生体試料の収集もこの村から始めた。東端の村で収集を行う日は、大塚さんと私が先発することになった。その村に暮らす漁撈民に興味を持たれたからだったか、その経緯についての記憶は曖昧だが、しかし、かなり速いペースで一緒に歩いたので、そのときのことはよく覚えている。村々を抜けていく途中で挨拶などを交わすうちに、事前に伝えていた時間に間に合いそうにないことがわかり、急ぐことになったのである。大塚さんにはゆっくり来ていただこうとしたが、かなり距離があったにもかかわらず、結局その後も付き合ってくださった。しかも、ペースが速まっても、それまでとほとんど変わらぬ様子であった。研究室の中でのことしか知らない当時の私には、初めて見るフィールドでの姿であり、強く印象に残ることとなった。私はその後もニューギニアでの調査を継続することになったが、大塚さんとフィールドで時間をともにすることができたのは、残念ながらこのときだけであった。

最初の調査を終えてかなり経ってから、諸先輩方のおられる集まりにおいて、大塚さんが歩くことに自信を持っておられたとの話を聞く機会があった。すぐに、ニューギニアで早歩きに付き合っていただいたときのことが思い出され、変わらぬ様子で早歩きされていたことに納得した。当時の大塚さんの年齢を越えた今、私自身がどの程度歩けるか甚だ心許ないが、気持ちだけでも持っていたいと思う。

大塚さんには、博士課程までご指導いただき、研究以外のことでご面倒をおかけしたこともあった。研究室を離れた後、私は大塚さんの研究に直接関わることはほとんどなかったが、大塚さんとは学会や研究会でときどきお会いし、それが自分の研究を振り返る機会となっていた。

感謝の気持ちとともに、心よりご冥福をお祈りいたします。

国際人の大塚さん

市川 光雄
京都大学名誉教授

大塚さんの名前を知ったのは、たしか 1971 年のことだったと思う。その年に私は 6 年間の学部生活の後になんとか大学院に進学した。学部時代には山登りや旅行に熱中してほとんど勉強には縁がなかったが、その反動で大学院に進んでからはとにかく勉強に精を出した。とくに私が進もうとしていた分野、「生態人類学」では、その頃はまだ何をどのようにすれば研究になるのか、手本になるような研究も出ていなかったので、とにかく片端から論文の類を読み、それがどのようなデータに基づいて、どんなふうにまとめられたものか、どうすればそうした研究ができるのか、などということを考えた。なにかを明らかにしたいというのが「研究する」ことであるとすれば、私は「研究する」ことよりも、どのようにしたら「研究になる」のかについて思案していたといえる。当時はレヴィ＝ストロースなどの構造人類学が流行りだした頃であるが、それらは知的好奇心を刺激することはあってもとにかく難解で、しかも私が目指す研究の実践のためにはほとんど役にたたなかった。私が関心を持ったのは、今西錦司編の「村と人間」や梅棹忠夫のモンゴルや東アフリカの牧畜に関する研究などの、いわゆる新京都学派の著作だった。いずれも自然科学出身者らしく、経験的なデータに基づいてわかりやすく論を進めている点で、私の進もうとしている方向に近いと思った。

そうして自分の研究について模索しているなかで、大塚さんの瀬戸内海の漁民に関する 2 つの論文に出会った。「人類学雑誌」に掲載された情島の漁民に関する研究である。ひとつは 1970 年に発表されたもので、漁民の活動時間とその個人差に関する研究だった。もうひとつは船上の微気候に対する適応に関する研究で、ちょうど私が大学院に進学した年に発表されたものだった。まず、私と 2 才違うだけなのに、すでに複数の論文を、しかも英語で発表していることに驚いた。2 本目の論文はとくに印象的だった。情島の漁師は小型船で一本釣り漁を行うが、その船の上にテントを張ることがある。この研究は、テントが張られる気候条件を分析したもの、すなわち、船上の温度が上がるとテントで日陰を作るという、微気候への技術的適応を示したものである。一見すると当たり前のような現象を定量的なデータをもって説明したものであるが、とにかく明快で新鮮だった。こんなふうに研究ができるのだと感心したことを覚えている。

その後、大塚さんとは生態人類学研究会や囲碁大会でたびたびご一緒させていただいたが、そのたびに飾らない性格と卓越した社会性に感銘を受けてきた。大塚さんの囲碁について語るのはもっと適当な人がいると思うので、その方たちにお任せしたい。私とは 2 子を置いても勝てないほどの力の差があったが、一度だけ勝たせてもらったことがある。

大塚さんは、生態人類学関係では傑出した国際的研究者だった。半世紀も前にニューギニアなどの海外での調査に着手し、その成果を続々と英語で発信していた。私は 30年以上前に 2 度ほど国際会議やシンポジウムでご一緒したことがあるが、大塚さんはすでに名を成した研究者だった。1991 年にパリで開催されたユネスコの「Man and Biosphere」の会議では、大会議場の壇上で司会を務めた大塚さんを仰ぎ見ていたことを思い出す。最近の若い世代は語学も達者で、国際会議にも積極的にかかわっているが、著名な外国人研究者を前にしてあれほど堂々と振舞えるのは日本の人類学者のなかでも少ないのではなかろうか。それにもかかわらず、大塚さんの目線は低く、我々がまだ駆け出しだった頃から、対等に接していただいた。

生態人類学（あるいは人類生態学）の草分けのひとりとして、日本、東南アジアそしてニューギニアを駆け巡り、未踏の分野を切り開きつつ、多くの後進を育てた大塚さんのご冥福をお祈りしたい。

大塚さんと生態人類学研究会・生態人類学会

稲岡 司
佐賀大学名誉教授

大塚さんが 2022 年 12 月に 78 歳で急逝されてから 1 年以上が過ぎてしまった。葬儀もなかったので喪失の実感がまるでないまま、僕は昨年 10 月に東大人類生態学教室（1965 年発足）主催で開かれた大塚さんを偲ぶ会で、大塚さんが 25 歳で助手になられた 1970 年頃から教授で退職される 2005 年迄の数々のプロジェクトの話を中心に 30 分程度話させて貰った。僕が、若き助手だった大塚さんに卒論のお願いに行き、その後熊大や佐大に勤めてからもパプアニューギニアやバングラデシュ、トンガのプロジェクトで一緒に仕事をさせて貰ったからである。大塚さんとの思い出話は本当に山ほどあったが、その時には時間の制約もあり、珍しく原稿を用意して淡々と仕事の事を話した。でも、多くの方がご存じのように、大塚さんはこの学会の前身となる生態人類学研究会（1973 年に発足し 1995 年に学会になる）ともう 1 つの「温泉学会」であるオセアニア学会（1995 年発足）の創設からその後の運営に深く関わった人である。

偲ぶ会には両学会の関係者も多々来られていたが、大塚さん自身が毎年年度末にエンジョイされていた 2 つの学会に対するスタンスには、大きな違いがあったように思う。オセアニア学会は学会発足と同時に英文誌を発行するという「偉業」を成し遂げ、日本学術会議にも登録されている真っ当な学会だが、この生態人類学会というのはいつまでも若い（毎年変わる院生が多く参加する）学会で、正式な学会誌を刊行する動きは全くない。既に生態人類学研究会の創始者（敬称略で、田中二郎（当時は東大文化人類）・伊谷純一郎・原子令三・掛谷誠（京大人類）・西田利貞（当時は東大人類）・鈴木継美・大塚柳太郎（東大人類生態）など）の多くが亡くなってしまったが、皆で集まるそもそもの目的がその年度のフィールドワークの情報交換をしながら疲れを癒すためだったので、（伊谷先生主導で？）研究会を学会にする時にも、傍で見ていてもそれほど積極的ではなかった。それでも「学会」という体裁にしたのは、生態人類学会での発表を就職が難しい院生のせめてもの業績にするという思いやりのためだった。

さて、僕もこの研究会・学会に大学院生の時に参加させて貰ってから、研究会の頃に熊本で一度、そして 2005 年度の学会（第 11 回大会）を佐賀でお世話させていただいた。もちろん大塚さんは両方に来られたが、熊本の時には先ほどの創始者のほとんどが来られ、阿蘇の地獄温泉で前夜祭（盛大な囲碁大会）をやった後、南阿蘇のホテルグリーンピアの大広間でタバコの煙渦巻く大宴会と、別室での 2 次会を派手にやった記憶があり、後でホテル担当者から「これが学会というものですか !?」と大変驚かれたものである。一方、佐賀（武雄温泉）の時は、創始者の多くは定年退職されており、「もう学会発表を聞く気もしない」とばかりに別の高級な旅館やホテルを予約し、学会が始まる昼から囲碁大会をほぼ徹夜でやっておられたものの、学会とは軽く繋がっている雰囲気はあった。その後、この囲碁大会は年 2 回（関東と関西）開催となったようで（僕にも歳をとるにつれ魔のお誘いが来るようになったが）、誰かが亡くなっても「XX さん追悼記念囲碁大会」とか気丈な名前を付けてめげずに続けておられた。でも、さすがに大塚さんが亡くなってからは、この囲碁大会は自動消滅の状態にあるようだ。

大塚さん達はこの学会と総会の将来について特に何も言われなかったが、僕は「生態人類学の学問的発展と、それを支えるフィールド研究者の情報交換」に「慰労会」を加えて長く存続してもらいたいと思っている。会長の時に少し（FB を立ち上げたりして）トライしたが、皆さんが「生態人類学」をあまり自分の専門分野と感じていないのか、学会誌の発行までにはまだ力不足のようだ。じゃあ「東大の人類生態学会はどうなの？」と聞かれると、これもまたお寒い話ではあるが・・・。

大塚さんの研究

梅﨑 昌裕
東京大学大学院医学系研究科

大塚さんの追悼となると、ご本人がいないのをいいことに、お酒にまつわる話題ばかりになりそうなので、まじめなことを書きたいと思います。大塚さんの指導を受けたものとして、いろいろなところで大塚さんの学問的な評価をきくこともありましたが、ちょっと違うなという感じがいつもありました。おそらくは、大塚さんの大事な仕事がほとんど英語の論文として発表されており、日本語の論文や単行本で発表されているのは、そのごく一部ということがあるのだと思います。日本人の仕事をわざわざ英語で読まなくてもよいのではないかという気持ちはわからなくもありませんが、それでは大塚さんの学問的評価には不十分だと感じます。

私の個人的な意見ですが、大塚さんの最も代表的な仕事はパプアニューギニアのギデラを対象に実施した個体群生態学の研究だと思います（Ohtsuka et al., 1985; Ohtsuka, 1986）。ギデラは、4000 ㎢の広大なテリトリーに 13 の村落を形成していました。大塚さんは、この全ての村落をまわって 3 世代以上をカバーする詳細な家系図を「完成させ」、そこに登場する個人が誰と結婚し、どこで生まれ、どこで死んだか／生きているかという情報を追加しました。「完成させ」というところがポイントで、ギデラ語を話す人々は基本的に内婚だったので、他の村に婚出した個人が、行った先の村で収集する家系図に本当に登場するかを確認し、異なる名前で呼ばれる個人の名寄せをして、家系図から漏れる人がいないことを確認するなど、大変な苦労と工夫があったことを生前お話しになっていました。この研究では、近代化の影響を受ける前の時期、ギデラの年あたり人口増加率が 0．02%であったことが推定され、さらにギデラは元々マラリアなどの感染症リスクの少ない内陸部で生活していたのが、人口の増加にともなって主食のサゴヤシが不足するようになったことで感染症リスクの高い地域にも居住するようになったという個体群の動態が再現されました。

この調査のきっかけになったのは、1971-72 年にかけて、ギデラのひとつの村落であるウオニエでの調査で収集した家系図の予備的な分析で、ギデラが家系図の情報をよく記憶し、それが実際の人口動態を反映するものであることを確認した上で、1980 年と 1981-1982 年に 9 ヶ月に及ぶ家系図収集を目的にした調査が実施されました。生前、大塚さんは調査地にいくと「調査は繊細にそして大胆に実施するものである」というようなことをよくおっしゃっていましたが、その背景には他人には大博打にもみえる 9 ヶ月の家系図調査が、実は 10 年ほどあたためた構想の上に実施されたという経験があったのだと思います。私もいい歳ではありますが、オリジナリティとパイオニア精神を重視する大塚さんとの思い出を胸にいだいて、おもしろい研究をしたいと思います。

（文献）

Ohtsuka R, Kawabe T, Inaoka T, Akimichi T. (1985) Inter- and Intra-Population Migration of the Gidra in Lowland Papua: A Population-Ecological Analysis. Human Biology, 57: 33-45.

Ohtsuka R. (1986) Low rate of population increase of the Gidra Papuans in the past: A genealogical-demographic analysis. American Journal of Physical Anthropology, 71: 13-23.

ロールモデルとしての大塚先生

小谷 真吾
千葉大学文学部

今から 30 年ほど前、当時東大人類生態学教室の大学院生であった私は、毎晩といっていいほど大塚先生と二人で、あるいは梅﨑さんをはじめとする他のメンバーと一緒に教室の会議室でお酒を飲んだものである。他の方も書かれると思うのだが、

先生のエピソードとして最初に思い浮かぶのはお酒のことだろう。他の方、特に先生と同年輩の方々は、楽しいお酒のエピソードを語って下さるのだろう。でも、私と飲むお酒は先生にとって楽しかっただろうか？

学部生時代、大塚先生と同じ理学部人類学教室に学んだ私は、人類学的フィールドワークにあこがれて人類生態学教室の門をたたいた。具体的には、先生の代表作である *Oriomo Papuans* の記述にあこがれてである。ニューギニアの奥地（本当はそんなイメージなどフィクションでしかないが）に長期滞在し、現地の人びとと同じ暮らしをしながら、でもスマートに最新の方法や理論を駆使したデータを持ち帰る。そんなフィールドワーカーを目指してもいいのではないか？少なくとも *Oriomo Papuans* には、そんな姿が描かれていたのだから。

大塚先生と飲む際は、だいたい「君は何をやりたいの？」「それのどこがおもしろいの？」と問われ、私がそれに進化論とか構造主義とか、よく分かってもいないのに抽象的な議論をしようとして怒られるということの繰り返しであった。少なくとも私にとっては楽しいお酒ではなかったし、先生にとっても楽しくはなかっただろう。私が就職して後、先生と楽しいお酒が飲めるようになってから振り返ってみると、その楽しくなさは次の2点に要約できるのだと思った。1. 大塚先生がその時期教授に昇任したばかりで、忙しすぎてまともなフィールドワークにも行けず、まして大学院生の気持ちにまで配慮する余裕がなかったこと。2. 小谷が夢想的フィールドワーカーで生意気であり、さらに酒が弱く気の利いた話題も提供できなかったこと。

振り返るまでもなく、2点目については在学中にすでに気付いていたともいえる。院生時代、大塚先生にフィールドに2度ついて来てもらったことがある。1度目は、ボサビという言語集団に入れるよう数日現地の人びとにあいさつして回った時、2度目は、研究グループとしてパムというマヌス州の島で生体サンプルを収集（私は民族誌的データを収集）した時である。その際、現地では先生はお酒は一滴も飲まれず、まして私を怒るようなことはされなかった。そもそも、私に構うより、現地の人びとと対話することに注力されていた。現地を離れた行き帰りの首都ポートモレスビーでは、やはり楽しくないお酒になり怒られたが。

つまりは、私が勝手に作り上げた格好いい、成りたい人類学者イメージが間違っていた、そして大塚先生はそのロールモデルになるのは絶対に嫌だという意思の結果としての楽しくないお酒だったのだろう。「現地の人びとと同じ暮らし」は具体的には人びとと衣食住を共にすることでしか経験しえないこと、現地で「スマートに最新の方法や理論を駆使」することは全く必要なく、データは果てしない人びととの交渉でしか得られないこと、それが理解されていないことが不満だったのだろう。

右往左往した末に、大塚先生と同じく大学院生を指導する立場になった私は、2点目の理由は痛烈に理解できる。若い日の私と同じような感じで、あこがれの人類学者になりたいとか、現地の人びとと同じ暮らしをするのが格好いいとか言われても、じゃあ「誰に何を聞きたいの？」とか、「それのどこがおもしろいの？」と返す他ない。1点目の理由についても、今なら理解できる、というよりあこがれる。自分が感じるおもしろいことを追求できない状況を、飲食を共にする相手に愚痴るという日常生活そのものの姿だったのだなと理解できる。つまりは、大学院生を相手にしてもフィールドワークに臨むときと同じ心構えだったのだろうとあこがれる。そこは、現地の人びとを相手にするように、お酒を介さないでもいい対話を期待したかったが。常在フィールドワーク、それが私の知っている大塚先生の姿であり、現在の私のロールモデルである。

ただ、私はお酒が弱いし、他人に強く交渉できないので、大塚先生のようには決してなれないということも理解している。さらに、私が依然夢想的フィールドワーカーなのかどうか、先生と楽しいお酒が飲めるかどうかで確かめ続けたかったのだが、もうそんな機会が無いということがたまらなく寂しい。

大塚さんが大好きでした

河合 香吏
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

大塚さんが亡くなったことが、亡くなって1年以上が過ぎた今でも現実のことと思われない。日常的にお会いするような間柄ではなかったから、しばらくのあいだ会っていなくても、少なくとも年に1度、生態人類学会大会（旧生態人類学研究会）でお会いできる、そんな関係だったせいでもあるのだろう。大塚さんにお会いできる生態人類学会をいつも楽しみにしてきた。

私は京都の伊谷門下だったけれど、東大の大塚さんには本当にお世話になった。まずなにより、私の学位論文の公開は大塚さんのご尽力なくしては果たせなかった。京大の理学研究科に提出した学位論文は、東アフリカ牧畜民の民族医学に関するもので、本文が原稿用紙300枚をゆうに超え、これに大量の図表や事例のアペンディックスを加えた長大なものとなってしまい、通常の学術誌に投稿する道は閉ざされていた。公表先をあちこち検討したものの、八方塞がりの状況だった。困り果てていた。そんな私に救いの手を差し伸べてくださったのが大塚さんだった。

その年の生態人類学会は群馬の水上温泉で開催された。私は意を決し、藁をもつかむ思いで、抱えていたこの問題を大塚さんにぶつけた。夜の懇親会のあと「囲碁部屋」で碁を打ってらした大塚さんの斜めうしろに座り、「何とかいい方法はないでしょうか」と訴えた。少々お酒の入ってらした大塚さんは、きっと対局も調子よく進んでいたのだろう、うんうんと頷きながら話を聞いてくださり、「わかった。ともかくその原稿一式を僕に送ってくれるか」とおっしゃってくれた。

帰洛してすぐに大塚さんに送った。大塚さんは「これは面白い」と評価してくださり、書籍として刊行することを勧め、東京大学出版会のベテラン編集者の浜尾悦子さんに紹介してくださった。私の学位論文は、大きく書き直すことを条件に、一般書として刊行されることになった。この打ち合わせのあと、本郷にある大塚さんと浜尾さんの行き付けのお寿司屋さんでご馳走になり、「本を書く（作る）」ことについて、その覚悟と方法と楽しさを教わった。初めて本を書くことになった私は、お二人から多くのアドバイスを受けつつ、1年以上をかけて書き直し、刊行にこぎつけた。それは苦闘の連続だったが、同時にとても楽しい経験でもあった。この学恩は忘れられない。大塚さんなくして今の私はない。

その後、大塚さんからは、大塚さんをリーダーとする「未来開拓プロジェクト」で、何度か研究会に呼んでいただき、そのたびに多くを学ばせていただいた。

2020年以降、京都大学学術出版会から刊行された「生態人類学は挑む」シリーズ全16巻は、大塚さんと寺嶋秀明さんを編集委員長とし、私は副編集委員長として実働部隊となってこれに関わった。東京と京都で何度も編集会議が開かれた。そして、京都での編集会議のあと、大塚さんと二人で東京まで帰ってきたのが大塚さんと時間をともにした最期となった。

大塚さんは新幹線のチケットを「ジパング倶楽部」という高齢者向けの特別割引でとってらした。そのチケットは「のぞみ」には使えなかったが、私は「のぞみ」に乗って急いで帰京するよりも、大塚さんといっしょにゆっくり帰ることを選んだ。京都駅につくと、30分に1本しかない「ひかり」の発車時刻が迫っていた。大急ぎでチケットを買い、なんとか乗り込むことができたが、車中で飲み食いするお酒とおつまみを駅で買う時間的余裕はなかった。しごと帰りの夜の新幹線で飲み食いなしはつらい。だが、新幹線には、こんなときにはとてもありがたいワゴン販売があった。大塚さんはワゴンが来るとすぐさま呼び止め、ありったけのワインの小瓶をすべて買い占めた。赤・白あわせて10本以上あっただろうか。おつまみもぜんぶ買った。ワゴン販売のお姉さんは驚きを隠しきれない表情で大量のワインとおつまみをテーブルに並べ、「ごゆっくり」と微笑んだ。

品川に着くまでの 3 時間、大塚さんはずっと上機嫌だった。たくさんたくさん話をした。新幹線を降りたあとも、山手線、西武線でいっしょに帰ってきたが、大塚さんはずーっとしゃべり続け、ずっとご機嫌だった。

そんな大塚さんが私は大好きだった。厳しい側面もあった大塚さんだが、私には感謝とともに楽しい思い出ばかりが蘇る。もうお会いできないのは寂しすぎる。

パプアニューギニア調査

河辺 俊雄
高崎経済大学地域政策学部

私が大塚さんと共に、パプアニューギニアに初めて足を踏み入れたのは、1980 年のことであった。そのとき訪れたのは、西部州の低地に居住するギデラの社会である。大塚さんは、初めてではなく、1967 年の予備調査を経て 1971 ～ 72 年に故渡辺仁先生と共に本調査を行って以来、約 10 年ぶりの調査となった。西部州の州都ダルーからウィピム村にセスナで飛び、歩いて隣村のウォニエ村に到着した。大塚さんはこのウォニエ村を本拠地として調査をおこなってきた。

ウォニエ村の人々は、久々に会う大塚さんや渡辺仁さんのことをよく覚えていた。10 年ぶりの再会に、大塚さんもとても嬉しそうであった。とりわけアシスタントをしていたソコリとの再会は格別の喜びとなった。ソコリの二人の娘も会いに来たが、一人は実子で、もう一人は養子である。この養子の名はピリカで、大塚さんが名付け親であり、アイヌ語にちなんでつけた。ギデラでは養子は頻繁に行われる。大塚さんもソコリの父、アケレの養子となった。そのおかげで、肌の色や顔つきの違う日本人が、村人に広く受け入れられたのだと思われる。

ウォニエ村で楽しい日々を過ごした後、大場さんと私、そして今回もアシスタントのソコリも加わり、ギデラ 13 村すべてを回る調査を始めた。

ギデラは東経 143 度、南緯 9 度に位置するオリオモ台地の東部で、4000 平方キロメートルにおよぶ広大なテリトリーで暮らしている。オリオモ台地は標高が数十メートル以下の低平な土地で、北はフライ川の下流域、南はオーストラリアとの境界になるトレス海峡に面している。ギデラの 13 村は点在しており、村々を巡る旅はおよそ 2 カ月かかった。

ギデラ全体の特徴は、低湿地帯に生育するサゴヤシを利用することである。サゴヤシを切り倒して、樹皮を削り、幹を砕いて内部に蓄積するデンプンを水で絞り集める。このデンプンをサゴの葉に包んで、焚火の上で焼く。これが主食である。一方、村によって環境条件は異なり、内陸部では、弓矢による狩猟が盛んなのに対し、川や海に面した村では漁撈活動が活発に行われる。移動するのは、内陸部では徒歩に頼らざるを得ないが、川沿いや海岸の村ではカヌーが利用される。

村々を巡りながらの調査で、大塚さんと私はそれぞれ別の目的を持っていた。大塚さんは家屋の配置や家族を調べた後、村人を集めて祖先を詳細に記録し、系図を作成した。私が担当したのは身体計測で、この予備調査では、計測器具を持っていかなかったので、身長と体重を測定した。

翌年の本調査では、環境条件の大きく異なる 4 村落を選び、4 人の調査者が長期滞在した。大塚さんが内陸部のウォニエ村、秋道智彌さんが川沿いのウメ村、稲岡司さんが海岸のドロゴリ村、私が北方のルアル村で調査した。大塚さんと私は前年と同様に、全 13 村を巡った。大塚さんは系図を完成させ、私は身体計測（身長、体重、胸囲、上腕囲、下腿囲、皮下脂肪厚）を実施した。伝統的な社会における人びとの体つきが環境条件や生業とどのように関係しているかを明らかにするためである。

ギデラ族調査の終りは、西部州の州都タルーへ向けて、オリオモ川を下ることになる。船外機を付けた大型カヌーで静かな水面をはしるのは快適である。しかしカヌーは決して安全な乗物ではない。1982 年 1 月 1 日のカヌー転覆事故は忘れるこ

とができない。6 ケ月の調査を終えてダルーへ向かう途中、貴重なデータやサンプルを積んだカヌーが転覆したのだ。夜 8 時頃に出発して 20 分程進んだ時、川面に垂れ下がっていた蔓にカヌーのアウトリガー（舷外浮材）を引っかけた。アウトリガーは折れ、バランスがとれなくなって、全員水中に投げ出された。裏返ったカヌーにしがみつきながら、カヌーの底を叩いて助けを求めた。カヌーの胴部はくり抜いて空洞になっているため良く共鳴する。不安を掻き立てる大きな音が、オリオモ川に響きわたった。ようやく助け上げられても積荷を失った絶望感は増すばかり。だが、やがて捜索の甲斐あって、ノートやサンプルは全部回収された。好運にも、転覆したカヌーはすっかり裏返しにはならなかったらしく、調査資料の入った緑缶などはカヌーの空洞の中に引っかかって残っていたのだった。ただし、大塚さんの靴は水没してなくなってしまった。

日本に持ち帰ったサンプルは人類生態学のラボで分析されることになる。ぬれずに残ったノートは大塚さんの系図人口研究や私の身体計測研究などに結実した。

東京大学医学部人類生態学教室におけるパプアニューギニア調査は、大塚さんがリーダーとして科研費によるフィールドワークを実施した。生態学研究の対象は、居住環境、生業パタン、社会構造、近代化の程度などのさまざまな点からみて、パプアニューギニアの多様な社会の典型的なパタンをほとんど網羅している。私も大塚さんと同様に、すべての調査に参加した。調査の全容は、『ニューギニア：交錯する伝統と近代』（京都大学学術出版会、2002）にまとめられている。

ギデラ本調査のメンバー：右から鈴木継美、大塚柳太郎、秋道智彌、稲岡司、河辺俊雄（成田空港、1981）

ソコリと家族：ピリカ（左から 2 番目）は大塚さんが名付け親（ウォニエ村、1980）

ハチミツ採取：麦わら帽子、黄色の肩掛けバッグ、カメラの調査スタイル（ウォニエ村、1980）

私たちを歓迎するダンス：大塚さんも参加（ウォニエ村、1980）

食物サンプルを作成するための天日干し：日本に持ち帰って栄養分析（ウォニエ村、1980）

オオツカは飲んだど〜

木村 大治
フリー

私と大塚さんとのつきあいは、おもにトカラ列島の調査を通じてのものである。

トカラは鹿児島と奄美大島の間に連なる列島で、琉球文化と本土文化の接点として、民俗学や人類学の領域で早くから注目されてきた。そしてこの島々は、日本の生態人類学の揺籃のひとつでもあった。生態人類学が立ち上がった 1970 年代には、沖縄を中心とする南島地域での仕事が非常に多かったのである。トカラでは 70 年代前半に京大の掛谷誠さんが平島と悪石島で生業活動の調査をおこない、そして東大からは 70 年代後半に、大塚さん、口藏幸雄さん、門司和彦さん、五十嵐忠孝さんらが漁労活動を中心とした調査に入っていた。南島地域では生態人類学の対象とする「自然と人間のかかわり」がよく見える調査ができたのだろう。そしてそこで得た知識と経験を携えて、若い生態人類学者たちはアフリカへ、オセアニアへと旅立っていったのである。

私は 1980 年代前半、京大の学部時代に、太田至さんのプロジェクトに参加して，トカラ列島北端の口之島で野生化牛の調査をおこなった。その後、修士課程で再びトカラに入ることになった。牛の調査を続けたら、というアドバイスもあったが、私は人間を対象にしたかった。まず平島と諏訪之瀬島で予備調査を行い、そして平島に入ることに決めた。初めての人類学的な調査は、なかなかうまくいかなかった。いろいろやってみるのだが、ゼミでは「面白い」と言ってもらえない。修士の 1 年目はそんな苦しい状態で過ぎ、2 年目になってやっと糸口が見えてきた。人口 100 人に足りない島の人びとが、どういう「集まり」を作っているかということに着眼するのである。ある日誰と誰が一緒に飲んだか、誰と誰が一緒に漁に行ったか、といったデータを積み重ねていくことによって、制度のレベルには上がってこない人びとの社会関係を明らかにしようとしたのである。

飲み会のデータを取るには、自分も参加しないといけない。私は毎夜どこかで開かれる飲み会を訪ねることになった。私は酒は嫌いではないが、さほど強くもなく、少し飲み過ぎると眠くなってしまう体質である。(生態人類学会の懇親会で、私が釈迦涅槃図のような姿になっているのを見た人もいるだろう。)「キムラ、飲まんか！」と言われ、さつま白波のお湯割りを 1 センチ飲むと、また注ぎ足される。そのうちに寝てしまい、起き出してふらふらと民宿に帰る道すがら、側溝に吐いたことが何度かある。そして夜中に目が覚めたとき、枕元のフィールドノートに飲み会であったことを書き綴るのである。飲み会の席で、島の長老の長ジイや利オジによく聞かされたのが、「オオツカは飲んだど〜」そして「カケヤは飲んだど〜」という言葉であった。飲むことこそが人間存在の証のようなこの島でそのような勇名が残っているということは、相当のものだったのだろう。そのように飲みながら土地の人たちとねんごろになることを通じて、研究が進んできたのだ。

集まりのデータが仕事になりそうだ、という手ごたえを得つつあったとき、大塚さんが以前の調査で、誰と誰が一緒に漁に行ったかというデータを取っていた、という話を聞いた。私は大塚さんに連絡し、東大の本郷キャンパスを訪ねた。大塚さんは「使ってもいいよ」と、気軽に未発表のデータを提供してくれた。そのあと、赤門の近くの飲み屋に連れて行ってもらった。どのぐらい飲んだかは覚えていないが，私は先に酔って寝ていたかもしれない。

いただいたデータから言えることは私自身の取ったデータのそれと同質で、私のデータがたまさかの傾向を示しているのではないことが確認できた。修士論文を書く上でずいぶん自信になった。その後大塚さんには、私の博士論文のタイム・アロケーションを扱った部分を出版するときの査読を引き受けていただいた。私が 1990 〜 91 年にナイロビの学振に駐在員として赴任していた頃だが、的確なコメントに対して、日本から小松かおりさ

んに文献を送ってもらいながら、苦労して修正を施したことを思い出す。

そのように、あまり密に交流してきたというわけではないが、私の研究生活の節々にサポートをいただき、また生態人類学会の席ではいつもにこにこ笑う顔を拝見していた大塚さんである。いまごろあちらの世界で、陽気に飲んでおられるのではないかと思っている。

人類生態学のプロ

小西 祥子
東京大学大学院医学系研究科

私が初めて大塚先生とお話した（叱られた）のは、東大医学部健康科学・看護学科 3 年生の春に受けた人類生態学の講義だった。9 時から始まる 1 限の講義に 10 時すぎから出席し、出席者の名前を書く用紙に自分の名前を書きに行ったところ、「あなたさっき来たばかりじゃないの」と叱られた。しかしその後、卒業論文を書く学生（卒論生）として人類生態学教室に受け入れて頂くことになった。

4 年生の 5 月に卒業論文のテーマを教務課に届けることになっていた。日本における結核に関するテーマを用紙に書いて、指導教官である大塚先生の押印を頂くために持っていくと、「ふーん、あなたそんなことやるの。あなたは毎日大学に来なさい。」と歩き去りながらおっしゃったのでその日から毎日研究室に行くことになった。毎日行ったところで何をすればよいかわからなかったがとりあえず集会室で本を読んだりして過ごしていた。結局卒論では別のテーマに取り組むことになり、生まれて初めて論文というものを書いた。しかし私が初めて書いた原稿は論文とはいえないものだったことが大塚先生の添削をみてわかった。締切ギリギリまで卒論生の原稿を何度も丁寧に添削・指導してくださった。ようやく教務課に論文を提出して研究室に戻って来ると、赤ワインのシミのついた大塚先生の手書きの修正の入った要旨がネームボードに磁石で貼ってあった。再度要旨を修正して教務課で差し替えて頂いた。確か正午が卒論提出の締切だったと思うのだが、なぜ赤ワインのシミがついていたのか、あるいは修士論文の提出時のことだったのか、私の思い違いかもしれない。

東大国際保健学の修士課程への進学が決まっていた私は春休みに友人と卒業旅行に出かけることになった。しかし卒業論文がひと段落してから航空券を手配しようとしたらすでにいっぱいでとれなかったため、4 月に入ってから旅行に行くことにした。そのことを大塚先生に伝えると「バカモノそんなものは講義が始まる前に行け」と叱られた。しかしもう航空券を購入していたので予定通り旅行に出かけた。帰国するとすでに私が修士課程でトンガ王国にてフィールドワークをすることが決まっていた。2002 年 7 月に大塚先生と稲岡司先生に連れられて初めてトンガに行った。 1 週間ほど首都ヌクアロファの宿に泊まった後コロヴァイ村に連れて行って頂きマイラウさん・カロさんご家族のもとで厄介になることになった。10 月まで 3 ヶ月間滞在したが、当初思い描いていたタイムアロケーションや家系図作りといった調査は何ひとつできなかった。

初めてのフィールドワークを終えて帰国してもまともな調査報告は何もしなかったと思う。そのくせ焦っていたので教授室に行き、具体的な計画は何もないままもう一度トンガに行きたいですと言うと、大塚先生が「私はあなたが心配です」とおっしゃられ「先生私も心配です」と答えた。そんな状態であったが研究室や生態人類学会の先輩方にも助けていただき、修士課程 2 年の 2003 年 4 月から 10 月まで再度コロヴァイでマイラウ一家にお世話になった。おかげで無事に修士論文を提出することができた。

大学院にいる間何度も研究室の飲み会があったが、一番印象に残っているのは本郷にあった一休というお店での飲み会である。研究室のメンバーを前にした締めの言葉で大塚先生が「ここにいる人たちにはみんな人類生態学のプロになってもらいた

いと思っています」とおっしゃった。帰り途「人類生態学のプロかあ」と１人で感動しながら自転車を漕いだ。

自分の書いた論文が初めて学術雑誌に掲載された時にはとてもうれしかったが、大塚先生からは論文が受理された際に「どのようにすればもっとよい論文が書けたのか考えることが大切」であることを教えて頂いた。調査はシステマティックに実施すること、論文は読み手のことを考えてわかりやすく書くこと、そして論文の「殺し文句」が大切であることも学んだ。

大塚先生が人類生態学教室の教授でいらした際にはいつ怒られるかとビクビクしていたが、大学を退職されてからは穏やかになられた。大学院生をまともな研究者に育てよい研究をして質の高い論文を書けるようにしなければいけないという義務感で厳しい態度になられていたことが今になるとよくわかる。できの悪かった学生にも敬意と愛をもって接してくださった大塚先生に感謝しています。

ありがとう　大塚さん

佐藤 弘明
浜松医科大学名誉教授

二年前大塚さんの訃報に接したとき私は強い衝撃を受けた。その年の春に大塚さんから厳しい戦いになるとのメールをもらい、さらには秋に最後のはがきを受け取り、ある程度心の準備はしていたはずであったが、しばらくの間、何もする気が起こらなかった。私にとって大塚さんは兄事する先輩であったが、それ以上に大きな存在であったことを思い知らされた。

半世紀以上にわたる大塚さんとの付き合いの始まりは、渡辺仁先生の東大理学部生態人類学研究室であった。学部生の教室に隣接した生態人類の部屋には原子さん、大塚さん、武田さんが居て、夕方になると、碁が始まり、終わると飲み会という研究室に当然のごとく私は出入りすることになった。原子さんはしばらくして京大に移られ、入れ替わるように西田利貞さんが京大からこられた。大塚さんも保健学科の人類生態学教室に移られたが、碁会、飲み会は続いた。

酒豪であった大塚さんはどれだけ飲んでもおおむね静かであった。ただ、私は研究のことでよく説教をされた。少し、はにかむような様子でポロッともらす言葉は、的確であった。この説教は生涯にわたって続き、私はおおいに助けられた。囲碁もまた大塚さんとは打ち続けた。はじめ、私は大塚さんに二子置いていたが、いつの頃からか私の方がほんの少し強くなっていた。それでも会えばやろうかといつも言ってくれた。

私が沖縄に移ってからは大塚さんと会う機会は年に５，６度ほどに減ったが、会えば、必ず酒、碁になり、そしてもちろん説教もあった。沖縄時代、私のフィールドワークの地はアフリカであったが、大塚さんは論文など読んでくれていて、会えば、いつものようにポロッとであるが鋭い指摘をしてくれた。

四半世紀ほど前、大塚さんにカメルーンでのフィールドワークに講座の学生はどうですかと頼んだことがある。当初、大塚さんはしぶっていたが、なんとか承諾してくれた。こうして山内太郎さんがカメルーンのフィールドワークに参加してくれることになった。大塚さんにとって私は世話のかかる研究者であるばかりでなく、優秀な人材を連れ出す迷惑な奴だったのかもしれない。

ともあれ、あまりに早すぎる。もう少し説教を聞きたかった。もう少し碁を打ちたかった……。
大塚さん、ありがとう。

最後は会わずじまいの大塚さん

篠原 徹
滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長

もはや生死一如を感覚的に受け入れる年齢になってみると同じような年齢の友人の追悼文は書きにくいものである。それでも私の研究人生のなかでも同志と呼べる人は数少ないが大塚柳太郎さんはまさにそのひとりであったので書かないわけにいかない。生態人類学の濫觴のころを支えたもうひとりの親友であった掛谷誠さんは鬼籍に入ってもうすでに 10 年余になる。これで私はふたりのかけがえのない友人をついに失ってしまったわけである。ただ不思議なことに慟哭の思いというようなことにならないのは生死一如の感のなさしめるところなのであろう。ただ身辺の寂寥と無常迅速という以外に何ものでもない。

大塚さんとそれまで以上に親しく接することになったのは私が国立歴史民俗博物館に籍を置くようになってからである。関東にやってきたのは 1986 年以降ということになるので大塚さんの 77 年の生涯の後半約 40 年ということになる。この間、大塚さんに頼まれてこの 20 年ほど民間の環境研究助成金の審査委員などをふたつ引き受けていたが、委員会の終了後暗黙の約束のようになっていたので酒を飲みにいき、あることないこと談論風発したことを憶えている。なかでも印象的なことは、京都大学流の生態人類学がアフリカを舞台にしたのに対して、東京大学流の人類生態学がなぜニューギニアを研究の舞台にしたのかという私の問いに、それは人類進化の研究に欧米の近代の影響が少なく人類史復原という生態人類学の初期の目的にニューギニア研究が大きく資するに違いないという確信があったからであると言っていたことである。それは今でも輝きを失わない大塚さんの 1971 年から 1972 年にかけて調査したニューギニアのサゴヤシ常食集団であった Gidra 集団の個体群生態学的研究が証明している。フィールドワークによって収集された膨大な家系資料の分析から、欧米の近代化の影響を受けないつまり自然的状態における人間集団の人口増加率が 0.2%であることを明らかにした。大塚さんのこのことを書いた論文は生態人類学の輝かしい成果であり世界に誇りうる功績である。

大塚さんと一緒に仕事をしたのは彼をリーダーとして日本学術振興会未来開拓学術研究推進事業『アジア地域の環境保全』「地域社会に対する開発の影響とその緩和方策に関する研究」（1999 年～2002 年）にサブリーダーとして参加した時である。この仕事を通じて、大塚グループの若い研究者たちとも親しく接することができた。フィールドワークに基づく研究や議論を大塚さんや若い人類生態学の研究者たちと交わすことができたのは僥倖であった。

「生」の大塚さんと一緒に仕事をしてみてわかったのであるが、大塚さんの人類学的思考を支えていたのは自然科学的論理であり、どこまでもデータに基づいた論拠に固執する姿であった。私などはどちらかと言えばすぐ文学的なものに惹かれ情緒に流れるきらいがあるが、大塚さんはこうした抒情だの感性などは一切排除した思考の持ち主であった。ある意味それは徹底した近代合理主義者だったのかもしれない。しかし、それは大塚さんの自らを律する生き方なのであって、私のような情緒に流れやすい人間を排除するものではなかった。むしろ大塚さんはそうした自分とは反対の人間とつきあうのを楽しんでいた節がある。私などもそのひとりではないかと思う。不思議なことに彼との議論や対話で意見の衝突や対立というのは一度も経験がないのである。飲んで話をしていて時に意見が異なると「だけどさあ、篠原、そりゃあチョッと違うんじゃないか」と言ってまた会話をヤリトリして、最後は「そうだな、そうだな」で終わる。楽しい酒のつきあいであった。

それにしてもよく飲んだものである。彼が委員長の年 2 回あるふたつの委員会後の二人の飲み会を約 20 年間で 80 回、年 2 回の夏と冬の生態人類学会囲碁大会は 30 年ほど続けたのでその仲間との飲み会が 60 回とみると少なくとも 140 回になる。

一人の人との老熟になってからの飲食がこれほど多いのはチョッと異様なのかもしれない。

大塚さんの最後の1年はメールのヤリトリしかできず会えなかったのは慙愧に堪えないが、手術不能の癌の発症後も「生態人類学は挑む」シリーズ全16巻の編集長として、最後まで仕事を全うしてくれた毅然とした学究の姿勢には感謝以外何ものでもない。大塚さん、ありがとう。またそっちで飲もう。

追悼三句

蒼穹に山染めあげて鳥一羽

柳の字よ語りし酒は夢の跡

頑として会えずじまいの友が逝く　　酔牛

大塚先生の忘れられないひと言

末吉 秀二
吉備国際大学

大塚先生に初めてお会いしたのは、1993年の暑い夏だった。お茶の水から本郷までの登り坂を、当時、日大理工学部の助教授だった青木和夫さんと一緒に汗をかきながら歩いたのを今でも鮮明に想い出す。その目的は、人類生態学教室への社会人入学について、大塚先生にお話を伺うためだった。東大保健学科の出身の青木さんは、大塚先生とは旧知の仲で、「大塚先生は私淑する研究者のひとり」とおっしゃっていた。私はすこぶる緊張していて、大塚先生と何を話したかは正確に思い出せない。たぶん先生は、私に2、3質問をされた後、青木さんと談笑されていたと思う。大塚先生には爽やかな印象を感じた。

あれから30年、大塚先生は恩師として私の人生における大きな存在であり続けている。私が人類生態学教室にお世話になったのは、修士課程のわずか2年間であったが、その間、色々な研究者の方とお会いできた。そして、大塚先生には、修了の後も共同研究者として、論文の助言をいただき続けた。幸運としか表現のしようがない。

大塚先生は、学生のフィールドを訪ねることで有名だが、私の院生時代の調査地スリランカ、その後の、ヨルダン、タイ、そして淡路島へも足を運んでくださった。どのフィールドでも、私が有頂天になったあまり、先生を引きずり回してしまったことを今では深く反省している。

初めて大塚先生が訪ねてくださったスリランカでは、コロンボのスラム地区が調査対象だった。現地調査の後、大塚先生がコロンボにいらっしゃることを知ったコロンボ市長は、先生と私を夕食に招待してくださった。偶然にも、お二人がオーストラリアに留学されていたことで、酒席は盛り上がった。先生は人を引き寄せる力があると感じた。

私の次の調査地は中東ヨルダンで、1997年から1999年にかけ、JICAのWID・家族計画プロジェクトに人口分野の専門家として参加する機会に恵まれた。このプロジェクトリーダーは、当時、JICAの専門員をなさっていた佐藤都喜子さんでスリランカを紹介してくださったのも佐藤さんだった。

大塚先生は1997年と2012年の2度、ヨルダンを訪ねてくださり、調査地（アル・サフィ）や遺跡・自然保護区（アンマン、死海、ペトラ、ワディ・ラム、ダナ）をご一緒させていただいた。

このプロジェクトの対象は、アラブの出生規範が強いヨルダン農村部の集団で、出生率がきわめて高いことが特徴であった。大塚先生は、プロジェクトの調査結果を、Human Biologyに投稿するよう勧めてくださり、それが私の研究の始まりとなった。その後、2000年には、先生の紹介で今の大学に着任することになった。

大塚先生がおっしゃった2つの言葉が今でも忘れられない。そのひとつは、いつどのようなタイミングだったかは記憶にない（たぶんお酒を飲まれていた時か）が、「あなたの恩師は佐藤さんだよ」とおっしゃったことである。

佐藤さんは、スリランカとヨルダンを紹介してくださり、私が研究を始めるきっかけを作ってくださった恩人である。大塚先生のそのひと言には、縁の大切さ、研究におけるフィールドの重要性が込められていたのかも知れない。

もうひとつ忘れられないひと言は、論文の指導をいただいているときに「あなたは分からないことをやっているのだから」と、頭をかきながら、ポツンとおっしゃったことである。

アラブ地域の人口研究は限られていることを、先生は承知されてのことだと思うが、だからアラブ研究は面白いとおっしゃりたかったのかも知れない。また、人類の生存にとって人口増加が脅威となるとの懸念から、人口増加が続くアラブの実証的研究が大切だとおっしゃっていたのかも知れない。

振り返ってみると、大塚先生と論文について話すときが、私にとって一番楽しい時間だった。先生は、「僕がよく分かっていないのかもしれないけど」との前置きの後、いつも鋭い質問をされた。私が答えに困っていても、辛抱強く私の考えを聞いてくださった。今思うに、大塚先生が論文に求められていたことは、研究のオリジナリティと論文の美しさではないかと思う。

残念なことに、大塚先生とは適応について話をしたことがなかった。今となっては、記憶を辿りながら先生の考えを推量するしかないが、成書「人類生態学」に、適応とは集団にとって有意となる調整とある。今後の私の研究課題にしたいと思う。

大塚先生、本当にありがとうございました。

紀元前 2 世紀頃のナバテア王国の首都、ヨルダン・ペトラ遺跡にて（1997 年）。
大塚先生の健脚ぶりには驚かされた。

大塚さんを偲んで

須田 一弘
北海学園大学人文学部

大塚さんと初めてお会いしたのは、1982 年の札幌でのことだったと思う。札幌で開催された何かの学会に、当時、東大人類生態学教室の院生だった河辺俊雄さん（高崎経済大学名誉教授）や稲岡司さん（佐賀大学名誉教授）とご一緒に参加された折に、後輩の口蔵幸雄さん（岐阜大学名誉教授）を訪ねて北大にいらっしゃった。口蔵さんは北大文学部の助手をされており、私はその指導の下で北海道日本海沿岸漁村の調査を始めたところだった。夜の宴会の末席に私もくわえていただき、楽しい時間を過ごさせていただいた。そして、その出会いがその後の私の人生に大きな影響を与えることになった。また、口蔵さん、河辺さん、稲岡さんとは、現在に至るまで、親しくお付き合いをさせていただいている。

翌年、北大大学院に進学してからは、毎年 3 月に温泉で開催される生態人類学研究会に参加させていただき、夜明け近くまで一緒にお酒を酌み交わした。時には研究上のアドヴァイスを頂き、時には厳しく叱責されたが、年に一度研究会で大塚さんとお会いすることは当時の私にとって楽しみであり、かつ貴重な時間だった。その後、1988 年からは、大塚さんのお誘いでパプアニューギニアでの調査を始めることになるが、そこでの大塚さんとのエピソードは拙著「ニューギニアの森から」(2021 年、京都大学学術出版会）に書いたので、ここではその他のことを書きたいと思う。

大塚さんと初めて調査をご一緒したのは、1986 年と 1987 年に行なった奥能登にある柳田村（現能登町）の一集落でのことだった。大塚さんは、当時東大理学部人類学教室助教授だった故西田利貞さんとご一緒に、故近藤四郎先生を代表者とする科研費特定研究「変動する社会の家族にみられる文化と身体の相互作用」の研究分担者をされていた。この科研は当時としてはかなり大きなプロジェクトだったが、調査地は日本国内に限定されていたため、海外に調査地をお持ちだったお二人に代わって、私が研究協力者として奥能登に赴くことになった。私は、年に数回、北海道からフェリーに車を積み込んで能登に通ったが、時間がある時には、短期間ではあるが、お二人も能登に来ていただいた。その日の調査を終えて、夕食後にお酒を飲みながら、お二人に調査の話を伺う機会を持てたことは、とても貴重な経験になった。

調査のテーマは生業と人口に関するもので、1887 年から百年間の人口変動、転出者数と転出先、出生率等を、聞き取りを中心に調べた。それをもとに、*Journal of Human Ergology* に “Decrease of households in a rural community of Japan in relation to demographic and occupational change”（1988）という論文を 3 人の共著で書かせていただいた。

もともと苦手な英語で論文を作成することは、私にとって大変な作業だったが、大塚さんに丁寧に手直ししていただき、何とか掲載にこぎつけることが出来た。当時は、もちろんメールや zoom などはなく、原稿を郵送して添削していただいたり、学会に一緒に参加した際に喫茶店で数時間かけてご指導していただいたりした。この経験を通じて、集めたデータをどのようにまとめるのか、まとめたデータから何が言えるのか、論文を書くということはそもそもどういうことなのかということを教えていただいた。

能登の調査の翌年からはパプアニューギニアの調査や南太平洋のトンガ王国の調査をご一緒させていただいた。とはいえ、調査する集落は別々だったので、調査の前後に宿舎で数日間過ごしながら話をさせていただく場合が多かった。私より先にトンガに入り調査を始めていた大塚さんから、「荷物に余裕があれば碁盤を持ってくるように」と職場の大学にファックスが届いたことがあった。まさか本物の碁盤のこととは思わず、携帯用の小型の碁盤を持って行ったが、大変落胆されていたことを覚えている。

また、研究会や打ち合わせなどで東大に呼んでいただくことも度々あった。その場合、夕方から

はビールを飲みながら調査や研究の話を、時には怒られながら、時には笑いながら聞かせていただくことが楽しみだった。大塚さんの足元にも及ばないが、大塚さんを手本としてこれまで調査研究をしてきた。大塚さんのご冥福を心よりお祈り申し上げます。また、本年元旦に能登半島地震に被災された皆様に心からお見舞い申し上げます。

大塚さんを偲んで

高坂 宏一
杏林大学名誉教授

大塚さんが 30 歳を超えた頃、東大人類生態学教室ではいつしか教室員にリングネームが付けられるようになった―ダンディ誰某とかメンタル何某とかだ。40 年以上前のことだが、今でも覚えているリングネームには、ほかにクイック、ダーティ、ストロング、エンジェルなどがあった。そして、大塚さんのリングネームはビジーだった。恐らくメンタル何某が付けたのだろう。実に巧いリングネームが付けられたなと思った。まさに大塚さんは“ビジー大塚”だった。

リングネームの通り、大塚さんは諸々の仕事を抱えていつも忙しくしていた。しかしそんな状況にありながらも、遊びを楽しんでいた。当時、人類生態には教室名の“人類の人”と“生態の生”を取って“人生フィーバーズ”という野球チームがあった。そして時々、学内外のチームと対戦した。水色のユニフォーム（研究室メンバーの結婚式の引出物）を着てサードを守り、ヒョイと捕球して投げるのを本当に楽しんでいるように見えた。確か監督のようなことも兼ねていたと思うが、指示を出された記憶はない。でも勝負にはこだわっていたような気がする。大塚さんが勝負にこだわるのは野球だけではなかった。大学の周囲を笑顔でマラソンしているうちに、徐々に真顔になり競争になってしまったこともあるが、勝って満足そうにしていたのを覚えている。またある時、研究室でキング・サーモン（研究室メンバーがアラスカの新婚旅行から持ち帰った）を皆で食べたことがある。その時、大塚さん主導で料理したのだが、ダイナミックに包丁を使い、とても楽しそうにサーモンをさばいていた。そういうことが無心に好きな人だった。

当時、研究室や本郷界隈で飲むことは日常だったが、そんなある夜、大塚さんに「遊びが足りない」と言われたことがなぜか記憶に残っている。当の大塚さんはいつものようにまったく覚えていないと思うが、その時大塚さんがどのような意味を込めて言ったのか、私は真意を理解していなかったような気がする。ひょっとして大塚さんにとって研究は遊びだったのかも知れない。言い過ぎだとすれば、大塚さんの研究活動には遊びの要素が多分に含まれていたのだろう。大塚さんは本気で“遊び”に取り組み、楽しんでいた。東大の退職記念パーティーの挨拶で、もう一度生まれても同じ道を歩みたいと述べていた。幸せな研究人生を送ったのだと思う。

大塚さんは自分が遊ぶだけでなく、面倒見のいい人だった。提出締め切りが迫っても、なかなか書き上げられない卒論生（私）の為に、研究室に泊まり、床で仮眠をとりながら根気よくご指導してくれた。この追悼号を読む多くの人は知っていると思うが、大塚さんは酒豪だった。酒豪といっても、飲むほどに正体を失くし、記憶は飛び、時に怒り、稀に乱暴になった。そういう時の言動は、計らずして大塚さんが本当に何を大事にしているかを後輩に示すことになった。いつしか、そういう大塚さんに後輩たちは引き込まれていった。

大塚さんはフィジカルで動物的感覚を大切にする人だった。また、体力があり、顎と歯が強かった印象がある。こうした恵まれた資質がフィールドワークを支えた要因の一つだったのだろう。強制したり無理強いしたりすることはなかったが、自分と違う後輩に歯痒さを覚えながら、武骨にリードする匠だった。匠は卒論生や院生に研究、特にフィールドワークの面白さと魅力を教えてくれた。

当時は研究会だったが、私が初めて生態人類学の大会に出たのは京都美山で開催された第 6 回大会（1978 年）だ。初参加の故か、夜宴の混沌としたとんだ盛り上がりを薄らと覚えている。飲み、語り、芸達者な先達が歌い、踊っていた。生態人類学会に研究室の院生が参加するようになったのは、大塚さんがいたからだ。大塚さんが人類生態学教室の研究の方向と確立に与えた影響は測り知れないと思っている。

今こうして数十年前を思い起こしながら振り返ると、大塚さんが残したものの大きさを改めて思う。大塚さん、受けたご恩は忘れません。ありがとうございました。

大塚さん、ありがとう―幻の約束から『生態人類学は挑む』まで

寺嶋 秀明
神戸学院大学名誉教授

1973 年、大学院に入学した年から大塚さん（敬称は慣例によりすべて「さん」）とのおつきあいが始まった。生態人類学会の前身、生態人類学研究会の発足と同時である。その後、半世紀ものあいだ楽しく交遊できたことを心より感謝したい。

大塚さんのメインフィールドはニューギニア高地、私はアフリカ熱帯林であり、一緒に現地調査をする機会はなかった。しかし一度だけそのチャンスがあったと思う。院に入ってすぐの夏休み、南西諸島でフィールド探しをした。研究室の先輩掛谷誠さんに相談すると鹿児島県三島諸島の黒島が面白そうだとすすめられた。掛谷さん経由で大塚さんにその話が伝わり一緒に行こうとなった。ただ大塚さんはすぐには同行できないので現地集合となった。黒島は鹿児島港から 10 時間ほどだ。たいへん親切な人ばかりで、2 週間楽しく過ごした。

私はそれから沖縄に渡り数週間、座間味や久高島など漁村巡りをしたあと、掛谷さんに大塚さんの予定を確かめようと那覇から公衆電話をかけた。当時の私のフィールドノートには「掛谷さんが不在だったので秘書さんに大塚さんの動向をたずねる」との記載がある。ところが秘書さんは、大塚さんは南方に行くことはないだろうとおっしゃった。どのような理由かもう覚えていない。一瞬、「ありゃ、どういうこと？」と思ったが、その時点で私は久高島につよく惹かれていたので、落胆することもなく久高に戻り、海人たちにまじって一夏を過ごしたのだった。

あるときこのことを思い出して大塚さんに聞くと、柔和な大塚さんが急にきっとした顔つきになり「そんな約束はしてない」と断言された。どこかでなにかの食い違いが起こったのだろうが、いずれにしても大塚さんとの唯一の衝突らしきものである。

一方、他のことではよいご縁があって、3 度も大塚さんと一緒に生態人類学のシリーズものの出版に携わることができた。一つは 1996 年～ 97 年、『熱帯林の世界』全六巻（東京大学出版会）で、大塚さんと私はそれぞれニューギニア高地とアフリカ熱帯林の単行本を上梓した。二つ目は 2001 年～ 02 年、故原子令三さんご遺族の寄付による『講座生態人類学』（京都大学学術出版会）だった。大塚さんは『ニューギニア』、私は『エスノ・サイエンス』の編集を担当した。

三つ目が現在（2024 年 1 月時点）完了間近の『生態人類学は挑む』である。掛谷英子さんからお申し出のあった掛谷基金によるもので、2019 年春に大塚さん、私、篠原さん、河合香吏さん、梅﨑昌裕さんによる編集実動チームが発足し、京都大学学術出版会から『モノグラフ』10 巻と『セッション』6 巻からなるシリーズがスタートした。大塚さんは東大系執筆陣、私は京大系執筆人の編集とりまとめを担当することになった。

当初は 2020 年度から 22 年の 3 月までにほぼ月 1 冊づつという計画だったが、スタート直後にコロ

ナウイルスの大波に襲われた。大塚さん編集の『セッション』第 1 巻はほぼ予定通りに出たが、コロナはますます暴れ出し、全体としてかなりのペースダウンとなった。そこで、2021 年の 11 月 3 日、沈滞ムードをなんとか切りかえようと、篠原さんのあっせんにより京都新聞社で大塚さんと山極壽一さんと私の鼎談が企画された。しかし大塚さんはその夏あたりから体の異変を自覚していたそうだ。お医者にも診てもらったが、病の実態は不明であった。鼎談の当日は無理を押して京都まで来こられたことになる。それでも病気のことはまったく感じさせずにいつもの大塚節で活発に発言され、鼎談を終えたあと佐藤俊さんら応援団も加わって打上げをした（写真 1)。

年もあけて 2 月ころようやく病気の実態が判明した。遺憾ながらすでに深刻な状態だったという。ただその後も大塚さんは療養中の自宅から頻繁にメールやズームで著者や編集委員を叱咤激励をしてくれた。おかげでようやく今年の春、『生態人類学は挑む』全 16 巻が完結することになった。ひと足先にあの世住まいとなった大塚さんもきっと安堵されているだろう。

最後に、大塚さんとの交遊といえば「碁と酒」の話は欠かせない。生態人類学会ニュースレターでは物故した大先輩の追悼特集がこれまで 5 回あった。碁は観戦だけだった掛谷さん（没年：2013）を唯一の例外として、原子さん（1996 年)、伊谷さん(2001 年)、鈴木継美さん（2008 年)、西田利貞さん（2011 年）はいずれもその道の達人であり、わが国の生態人類学の影の原動力だったと思う。しかし近年若手の台頭がなく、貴重な生態人類学囲碁クラブは無念にも絶滅種となった。その記念としてここに戦う大塚さんのありし日の勇姿を掲げておきたい（写真 2、3、4)。

写真 1
『生態人類学は挑む』鼎談の打上げ。
大塚さんは右側前から二人目（2021 年 11 月 3 日）

写真 2、3
盛会だった囲碁大会。
（上）手前から二組目大塚さんと小山直樹さん（2011 年 1 月）

写真 4
恒例だった新春囲碁会の会場（京都嵐山）の玄関にて（2017 年 1 月）

憧れと畏敬

古澤 拓郎
京都大学

大塚先生の指導を受けていた学生時代、私は大塚先生のことが怖かった。畏敬あるいは畏怖の念を抱いていたというほうが近いかもしれない。学部 4 年次に人類生態学教室で卒論を書くことを希望した私は、大塚先生と初めての面談に臨んだ。私は、大塚先生が研究室のことを紹介してくれるものかと思っていたが、いきなり私に何を研究したいのかを問うた大塚先生は、私がその時考えていた（ほとんど具体的には考えていなかった）構想を話し始めると、それを最後まで聞くこともなく、つぎつぎと鋭利な突っ込みを入れ始め、それは私が何も言い返すことができなくなるまで続けられた。以来、研究構想を相談しても、論文を書いても「わかんない」と評価され、お酒があるたびに怒られた。学年が進み、研究の世界を知るにつれ、大塚先生がもつ圧倒的なフィールドワークの経験の厚み、知識の広さ、研究手法の多彩さ、分析の鋭さ、文章表現の巧みさを理解するようになり、その研究者としての大きさに畏れた。

今になってみると、大塚先生は学生を対等な研究者とみなして、甘やかすことなく、容赦をしなかった。夜中までサシで酒とたばこを呑み続け、ついに二人のタバコが枯渇したら、一緒に灰皿からまだ吸えそうなシケモクを探して、朝まで呑み続けたこともあった。先生ぶることなく、いつもフェアな方であった。

たくさんのチャンスとご指導をいただいたにも関わらず、私はたいそう出来の悪い博士論文を書いてしまった。私は自分が情けなく、大塚先生に面目がなく、以来、大塚先生に会う事を怖れた。

その大塚先生が、国立環境研究所の理事長を終え、自然環境研究センターの理事長になられた 2009 年、突如連絡をくださり、環境省から受託した事業の手伝いを依頼された。一緒にソロモン諸島に行き、SATOYAMA イニシアティブに関する調査をするという内容であった。私は面目躍如とばかりに張りきったし、大塚先生が私を頼りにしてくれたことを内心喜んだ。その後、今度は長尾自然環境財団の仕事を手伝って欲しいと言われ、2018 年からご一緒にベトナムを訪れた。研究というよりも、ベトナムの研究チームへのアドバイスや、プロジェクト管理が業務であった。そのころ私は若手研究者から中堅研究者になろうとしていた時期で、プロジェクト管理の難しさに悩んでいたところであったので、これを機に、大塚先生から管理業務の技を学ぼうと内心思った。大塚先生は自分の背中を見せて、人を育てる研究者であったが、このプロジェクトは私が大塚先生の背中から学ぶことができた最後になった。

ベトナム事業は、同国の若くて優れた鳥類学者、植物学者、動物学者、魚類学者、昆虫学者、地理学者、社会科学者らを多数集めたもので、石灰岩地形における生物とその保全に関する基礎研究であった。ベトナムのこれらの地域は、まだ研究が手薄く、未記載の生物がいる可能性が高く、その一方脆弱な生態環境条件のため、生物多様性が危機にあるという理由で、大塚先生はベトナム事業を手掛けたと伺った。学術界と世界を俯瞰的に見て、行動される姿はさすがであった。ハノイでも、調査地各地でも、研究チームや地元の方々から酒を薦められると、どんどん飲まれた。

ところで 2009 年にソロモン諸島に滞在した際、ギゾという町で夜、酒を飲みに行った。ホテルに帰って、自分の部屋に入ると、大塚先生がすぐにノックしてきた。何かと思うと、大塚先生は、財布もパスポートも入ったカバンを飲み屋に忘れてきたのだという。翌朝、飲み屋がやってきて、そのカバンを届けてくれた。また 2018 年のベトナムでは、ハノイについてホテルの部屋に入った途端、やはり大塚先生がノックしてきた。今度は、パソコンが無いという。成田の手荷物検査で、パソコンを取り出したまま、忘れてきたのだと発覚した。奥様がわざわざ成田まで取りに行かれたそうだ。あの、完璧人間のような大塚先生が、うっかりをするなんて、さすがにお年をとられたなと思った。

いまこそ大塚先生のお役に立つときと思ったが、コロナのせいでベトナムに渡航することはできなくなり、結局私がお役に立てることがほとんどなかった。海外渡航が再開し始めたあと、大塚先生が体調を崩されているという話も聞くようになった。

しばらくしたある日、私は元気な大塚先生と大いに酒を飲んでいる夢を見た。大塚先生は楽しそうで、私も幸せそうであった。目覚めたあと、私は大塚先生を畏れつつも、認められたかったのだといまさら自覚したが、奇しくもその夕方、訃報に接した。先生と呼ばれるのを喜ばない方であったし、常に第一線の研究者たらんとされていたが、私にとっては憧れの先生であった。

ベトナムの国立公園近くのレストランにて、いきなり女性店主に酒飲み勝負を挑まれてビックリしている様子

大塚柳太郎先生を偲ぶ

門司 和彦
長崎大学

中学生の時にヒトの生き方の多様性に興味をもち、東大に人類生態学という学問があることを知り、人類生態学のフィールドワークをするつもりで東大医学部保健学科に進学した。しかし、学科や授業には求めていたフィールドワークの匂いはなく、（無知が故に）何にも興味がもてず、理解もせず、無為な時間が流れていた。

大学４年目の３年生の末に、卒論のテーマのなかに「人類生態学のフィールドワーク、指導：大塚柳太郎助手」を発見し、大塚さんに初めて会いにいった。1975 年の早春のことで大塚さんが 30 歳、私が 22 歳になったばかりだった。その時、大塚さんは授業をもっていなかったので、そういう人がいることも知らなかった。何をやりたいか聞かれ、苦し紛れに「ヒトの行動進化をやりたい」と答えた。大塚さんは「それはすぐにはできないからフィールドを見るように。今年、自分はボリビアに行くから勝手にやっておくように」と言って、本人の論文と多くの本を渡され、幾つかのフィールドを紹介してもらった。シャラーの「マウンテンゴリラ」の原著などがあった。私が読むのに手間取っていると、「え、４日ぐらいで読めるだろ？」と言われた。また、「研究者になるにはスタートが遅い」とも言

われた。大塚さんがボリビアに行かれた後、結局、福島県・檜枝岐村の奥只見川の分村の戦後の人口変動と生業活動変化を調べることにした。予定より少し早く帰国した大塚さんにも雪のなかを車で一度来ていただき、なんとか卒業した。ボロボロだったけれども、住民の方々との接し方だけ褒めていただいた。その後、私は大塚さんに薦められた渡辺仁先生の文学部・考古学科への学士入学試験にも落ちて、研究生となってヨーロッパからアフガニスタンを一年弱、旅をして廻った。

大塚さんの卒論生になったら、回りの人が良くしてくれて、「大塚さんの面倒を見るように」と言われた。鈴木継美先生も東北大学に行かれていて、東大の人類生態学に自分の未来はないと思われていた時期だったのだと思う。「一か所に長くいるのは無能な証拠だ。自分も長くはいないから門司も出ていけ」という感じだった（でも、結局、鈴木継美先生が戻られ、大塚さんはずっと東大にいることになった)。まだ結婚前で、ほぼ毎晩飲んでいて、多くの武勇伝が語られていた。大塚さんと最後まで酒を付き合うのは大変だったので、私が重宝がられたのだと思う。はじめの頃、最後まで飲める本郷・菊坂下の竹乃屋？に行きたくて夜中にタクシーに乗るのだが、私も場所を知らなかったので、3回ぐらいタクシーに乗ってもたどり着けなかったりした。明け方近くまで飲んで教室に戻り、大塚さんにソファで寝てもらって私は床に新聞紙を敷いて寝ていた。それは苦痛ではなく色々な話が聞けて楽しい時代だった。大塚さんの肝臓は驚異的で、そんな生活でも朝から普通に研究をされていた。海外から戻り研究生として在籍させてもらっているころも良く飲みに行った。大塚さんが飲みだすと言っていることを聞き取るのが難しいのだが、とにかく、「研究で海外の研究者に負けないこと、そのために面白い良いデータを取ること」だけがいつも頭に残っているメッセージであった。それ以上の細かいことは飲みだしてから相談しない方が無難だった。今、私が志向している Field Observation-oriented Learning (FOOL) の原点はこの頃に芽生えたものだった。

研究と酒の他には、スキーと野球をよくやった。研究では勝てないと思っていたので、スキーだけは負けないようにしたいと思っていた。大塚さんは女性に斜滑降を教える時も容赦なく直滑降に近いような滑り出しをする。ほとんど後傾することなく前傾姿勢を維持する（飲んだ時もよく左斜め前に倒れ、左眉毛の上に絆創膏を貼っていた。決して後ろには転ばない！)。まっすぐ下に向かって前傾して滑っていく姿勢は大塚さんの学問への取組み、人生への取組みに似ていたと思う。横に逃れたり後傾したりしがちな私とはそこの根性、出来が違っていたのだと思う。

私が長崎に赴任してからも色々とお世話になり、気にかけてもいただいた。大塚さんはしらふの時は、他人に命令することもせず、叱ることもしない、優しい人だった。もし、大塚先生と出会っていなかったら、私はどんな人生を歩いていたのだろうか、と思う。大塚先生は、私の一生の恩人である。

大塚さん、ありがとうございました。
そのうち、そっちに行きますので、よろしくお願いします！

合掌

不肖の弟子として

山内太郎
北海道大学大学院保健科学研究院

不肖の弟子であった。数多の心配、迷惑をかけた。怒らせてしまったり、言い争いをしたこともあったが、期待と敬愛が交錯する中での出来事であった。

大塚先生の研究者としての偉大な業績について、また、シャイでチャーミングなお人柄について多くの人が書かれるだろう。繰り返すのは止めたい。また個人的なエピソードを縷縷と披露する気にもならない。何を書いたらいいのか悩ましい。とどのつまり思い出話を書くのは避けられないが、自分のために駄文を書かせていただきたい。

学部生のときに大塚先生の授業を受けていたはずだが、不真面目な学生だったため、ほとんど覚えていない。おそらくサボっていたのだろう。思い返すともったいないことをした。東大医学部保健学科では 4 年生から卒業論文（卒業研究）のため研究室に配属される。駒場から同級生の大橋順さんと研究室リストの上から巡っていくことにした。人類生態学教室はリストのトップだった（2 番目は疫学教室）。教室説明会（お茶の時間だったかもしれない）には、教室スタッフ、院生が揃っていた。鈴木継美先生がいらっしゃったことを覚えている。温かく迎えてもらい、研究室巡りは 1 番目で終了した。4 月になって正式に配属されると、新しく教授になった大塚先生の指導を受けることになった。その時は、大塚先生が東大を退職されるまで 10 年以上にわたり、学生・スタッフとして身近で薫陶を受けることになろうとは予想していなかった。

学部 4 年生の冬だったと思うが、大塚先生のご自宅でバーベキューに呼ばれた（後に毎年の恒例行事となった）。用事があり中座したのだが、大塚先生が駅まで送ってくれた。かなり酒も入り、足元がふらつく道中、研究者としての心構えを説かれた。踏切の前で「◯んでください」と言われたときはタイミングの良さ（悪さ）に思わず息を呑んだ。卒論では実験をやったが、向いていないと悟った。打ち上げか何かで、女子栄養大の関係者と鈴木先生のお宅でステーキをご馳走になりながら、大学院で何をやりたいか尋ねられた。「フィールドワークをやりたい」と即答すると、「大塚先生のような才能がある特別な人でないとフィールドワークは難しい」と久乃先生に諭された。「そうなんですね」と他人事のように聞いていた。なぜか根拠のない自信はあった。幸い、修士 1 年からパプアニューギニア（PNG）で調査を行う機会に恵まれた。

博士をとった頃、教授室で「山内は地域研究者なのか？」と問われた。突然の問い掛けに驚き、答えあぐねていると、強い口調で再度問われた。「人類生態学研究者です。」と力を振り絞って答えた。自分なりの覚悟だった。オーバードクターを脱出して、私費で PNG マフィアの巣窟だったオーストラリア国立大学に潜り込んだ。キャンベラは大学と国会議事堂しかない静かな場所で勉強するにはうってつけだったが、大塚先生を研究代表者とする未来開拓という大型プロジェクトが採択され、呼び戻された。研究代表者の名代として須藤健一さん、篠原徹さん、松井健さんら「猛者」と渡り合うことも多く、鍛えられた。大塚先生は東大の要職に就かれ、多忙かつストレスフルな日々だったが、助教授に着任した渡辺知保さん、同じ助手の夏原さん（後に清水さん）と教室を支えた。

東大退職時、大塚先生は PNG の貴重な資料をどんどん捨てていった。慌てて拾い集めていたが、本気で研究者を辞めるつもりなのだと、悲しくなった。今考えると相当の覚悟を持って、国立環境研究所に異動されたのだと思う。一つのケジメだったのかもしれない。

その後、縁あって北大に異動して人類生態学研究室を立ち上げた。教室の同窓会で大塚先生に恐る恐る報告すると、大変喜んでくれた。教授に昇進した時も同窓会で披露してくれた。大塚先生を喜ばせることができた数少ない思い出だ。修士のとき、PNG 高地で山道を歩いていた際に「山内は足が速い」と言われたが、褒め言葉だっただろうか。

札幌で大塚先生とワインを 2 本空けながら「院生に説教しているときに、自分が先生に言われたのと同じことを言っていることに気づかされた…」とか、「昔先生に言われた言葉の意味が、最近になってようやくわかってきた…」というようなことを、酔いにまかせて話したことを思い出す。大塚先生は、多くを語らずニヤッと笑いながら嬉しそうに聞いてくれた。

2021 年 11 月 27 日、第 35 回人類生態学教室同窓会。ハイブリッド開催ということで札幌から駆けつけた。現役の教室員以外の現地参加者は、大塚先生、渡辺知保さん、自分の 3 名のみだった。コロナ禍で懇親会はなかった。同窓会の後は教室で酒を飲むのが恒例だったが、人目を避けるように会場を出られた。医学部教育研究棟 13 階のエレベータまで見送りつつ話をした。最後の会話となった。

北海道大学に人類生態学の名前を冠した研究室を創設して 17 年が過ぎた。少しは師弟を超えてフラットにいろいろな話ができるだろうか…と楽しみにしていた矢先の大きな喪失であった。格好良いまま、Strong なまま逝ってしまった。「ズルいですね」と本人に言ったら、否定も肯定もせずにニヤッと笑う姿が目に浮かぶ。心の中で大塚先生と対話しながら、折りに触れ気付かされる自分の中にインストールされた大塚先生を意識しながら、不肖の弟子として「人類生態学」を探究していこうと決意を新たにする。

生態人類学会ニュースレター　No.29 別冊
特集　大塚 柳太郎氏追悼

2024 年 3 月 27 日発行
生態人類学会

生態人類学会ウェブサイト
https://ecoanth.main.jp/